時事新報

時事新報は一年三百六十五日一日も休刊無し

時事新報定價

時事新報へ一年三百六十五日一日も休刊セズ其代價還送料廣告料ハ左ノ如シ

一枚二錢〇一箇月前金五十錢〇三箇月前金一圓五十錢〇六箇月前金三圓〇一箇年前金六圓

〇時事新報社ヨリ直接ニ郵便ニテ還送スルモノニ限リ右定價ノ外ニ一箇月十五錢ノ還送料ヲ申受ク

時事新報廣告料前金

一行五號活字廿四字詰	一日限	二日以上六日迄	七日以上
一行ニ付	十二錢	十一錢	十錢五厘

月曜日幷に大祭祝日の翌日等他新聞紙の休刊日は限り時事新報配達の求めに應ず此場合には新報代價一箇月前金八錢にして地方に郵送する分は此外に貼用する郵便印紙の代價を申受く可し

第二千四百五十九號

明治廿二年十月卅一日　木曜日

舊暦巳丑十月八日　（庚、辰）

日出午前六時零三分　入午後四時十六分

月出午後十時零四十四分　入午前十時五十六分

潮汐午前九時十三分　午後十時十三分

（西暦一千八百八十九年）

時事新報

社會の風景を綴了する勿れ

社會の成行は猶ほ一個人の運命の如し人の廻り合せは一種不可思議のものゝよして俗に弱目に祟目とて不幸にして一旦不運の境に陷るときは種々の禍害一時に蝟集し來りて遂には首も廻らぬ仕儀に立ち至るゝとあれども之に反して一度幸運の路に向ふときは爲る事、為す事すべて都合よく前途さすゝ好望の氣運を現ずるものゝあり一見偶然に出ずるが如くなれ共決して偶然ならず蓋し人間の心は業外ゝ晩きものにして行路一旦の蹉跎に忽ち平生の志を挫き首を回らせば人事すべて非あり又幸運に向ふものゝ之と同樣の次第にして其始め些細の成功よりして前途の望に誘はれ知らず識らずして幾々日の出の勢を致すものゝあるは事實に疑ふ可らず顧ふに社會の成行も猶ほ斯の如く古來の歴史に徴するに事物創業の際には破竹の勢ゝして百事繁昌の色を呈すれども一朝の機に由り俗に所謂怪事の付くに及びては忽ち下り坂となりて漸次に零落せし例もなきゝあらず明治の社會は維新以來百事改進の一方に進んで殆んど旭日の昇るが如く其間時として内亂暗殺等の不祥事なきにあらざりしと雖も其性質は何れも封建の殘夢を帶びたるものゝゝ進ぎずして是等の殘滓は適さゝ以て改進の氣運を促すの動機となりて社會の大勢は進むあるも退くゝみとなし又明治十四五年の頃より官民の間は一種不快の感情を起して政論の不穩を敢し或る部分には支那流固陋論の再燃を見るなど天下の風景、何んとなく淋漓悲劇の相を現し人をして鄭慮せしめたる事なきにあらざりしかども固より大勢運動中の小波瀾にして毫るに足らず實際に於ても固陋論の再燃消えて後なし又一昨年は條約改正の中止に引續き保安條例實行さでの珍事を見たりと雖も本年に至れば憲法發布の大典と共に大赦の令を發せられ從來政治上の怨恨事悪は之れと倶に消滅して啟を撃て只管厚恩の否けなきに感泣し國家萬事の禍を忘れて明年の國會開設を待つの外、餘念なく平穏無事の如しと云ふも可あり然るに數月前より條約改正の問題突然湧出して大ゝ天下の物議と爲り甲論乙駁、議論百出を極めたる大勢の傾かんとする所か恰も一箇の強人を獲して項治の政治社會ゝ無數の問題を演ずるゝ至らしめたるは我社會前途の爲めに返すゝも遺憾に堪へざる所なり維新以來喘息の陋習はとかく跡を絶つ能はずして災に罹りし者も少なからざれども其遺きものは封建の餘毒より來り近きものは一種宗教の惑溺心より出でたるものにして即ち本年森子の事の如き其原因は政治にあらずして寧ろ信仰上の爽心ども稱す可きものなれば我輩は彼の狂者の所行を悲む傍ら社會將來の爲めには窃に之を齒牙ゝ掛けざりしに今度大限伯の難に至りては政治上の不滿爽心より來りしものと酷めざるを得ず今後若しも政談の社會に此種の氣風を行はれしめ黨派の軋轢さすゝ甚しきを加ふるに及んでは社會の風景如何なる極に陷る可きや今より想像して不安心ゝ堪へず即ち我輩が特に今度の行兇事件に付き遺憾を感ずる所以なり然りと雖も又飜て更ゝ一方より觀れば日本社會の前途は實に無量の望あるものゝゝして二十年來教育技術の進歩は世界無比と稱し商工の實業も近來は大に發達の色を現し殊に政治上に於て本年憲法發布の一事は内ゝ大に立國の基礎を固めて人民幸福の基を開きたるのみならず外に對しては世界の耳目を驚かし外人をして東洋文明國の旗稍たらざるゝを悟らしめ此有樣にして目出度國會の開設をも見るに至り官民ともゝ調和協同して事に此に從はゝ内治の改良は申す迄もなく海外諸國に向て對等の交際決して難事ゝあらざる可し我前途の望は實に此の如くゝして社會の方針を能く此一方に向け改進々歩、半途にして蹉躓の患を致さゝるに於ては國運の萬々歳疑ふ可らず彼の一時の兇事小波瀾に驚き大勢の運動を忘れて枝葉の彌縫策に忙しくし以て關らざる處に怪事を生ずるが如きは我輩の最も取らざる所、又最も忌む所なり左れば社會の成行は一個人の運命ゝ異ならず今日の有樣は恰も禍福分目の時節なれば社會先達の人々は憲を強くして自ら勉め眼中無一物、唯改進の一方に進んで二十年の辛苦を空うする勿らんと切に冀望に堪へざるなり

雜報

〇布哇通信　本月五日布哇ホノル、府發にて本社ゝ達したる通信に曰く目下我軍艦比叡、金剛と汽船山城丸は當港に碇泊中にて市中を見渡せば日本水兵は三々五々隊をなして徘徊し港内を眺望すれば日章の國旗は風に靡き布哇國の土人は此有樣を見て大に驚き日本國みゝ實に比類少なき開化國なりと思ふが如し山城丸は一千名程の日本人を載せ來りしかば此夢住民を嘱々に配附する都合なりと聞く當府は安る七月廿九日の振動艦隊より今日迄で無事平穏なる有樣にて氣候は頗る熱く日中の歩行ゝ困難を覺ゆ去る二日ゝは比叡の乗組士官が主人となりて當國の貴顕紳士及び其夫人令嬢等を艦内に招待し盛宴を張れり我軍艦乗組の水兵は其數頗る多きにも拘はらず少しも亂暴の行爲なく爲に當國士人の間に評判宜し偖今回賜暇を得て歸國の途に就く筈なる我艦隊事安藤太郎氏は三年前ゝ總領事に任ぜられて當府に來着せし以來事務に勉勵して大に功績を現はし日本帝國の名譽を高めしのみならず許多の我移住民を薫陶教育し特に一年半前よりは耶蘇教を信じ是が信徒となりて或は禁酒會を設け或は夫人と共に共濟會を起して貧民病者を救助し且つ當國の紳士と交を厚ふし交際上より云ふも又實易上より云ふも大に當國人士の信用を博し實に外交官中賞揚すべき功を奏したるものゝありと云ふも決して過言に非ざるゝあり左れば在留日本人及び當國人が氏を敬する事甚しく亂暴を極めし人々も氏の風ゝ化せられて品行を改むるに至れり氏が當國紳士の爲に敬愛せらるゝ確證は去る三日耶蘇信者が氏の爲に送別會を開きし時當府の重立ちたる人々集ひ來り當國外務、内務、大蔵諸大臣を始め八員三十三名より左に譯載したる書面を氏に贈りたるを見ても明白なるべし

安藤總領事に贈るの書　布哇ホノル、府に居住する下名等は閣下が日本帝國より派遣せられたる外交官として行ひたる事業に就き尊敬の意を表明せんみとを冀む閣下が公務上又は私交上に於て表はしたる公平の敬禮は下名等の大に感服する所にして又當國に來りたる多數の日本人の利益を計らんが爲め閣下が一身を犧牲として盡力したるは下名等の微心に實見したる所なり下名等は閣下が北太平洋の中央なる此嶋に於ける日本人をして美名を得せしむる爲ゝなしたる勞力は功を奏したる事を實見せし故に高尚なる人物が時と場所とを問はず常に有つべき力を知るを得たり閣下の盡力は後來太平洋群嶋と他國との政治上又は商賈上の關係を發達せしむるゝ與かりて勢力あらんみとを下名等は希望する者あり閣下が家族の健康を恢復せしめんが爲め一時當府を去らざるを得ざるゝ至りしは下名等の大ゝ悲む所なれども下名等の希望する所は閣下が此目的を遂げ速に布哇に歸へるにあり又下名等は真誠なる閣下の夫人が善事の爲に盡力せられたるを謝するなり偽令へ日本政府又は閣下は此の如き書面を要せざるならんと雖ども下名等は下名等の尊敬の意を表したる此書面が下名等の社會ゝ於て閣下の消費したる年月を愉快なる記憶中に保存するものなる事を信ずるなり

外務大臣　ジョナオステン
内務大臣　エーサーストン　書記總監　エフチ　ソーパル
大蔵大臣　サミュールデーモン
（以下略す）

〇交詢社關西支社の開社式　兼て本紙ゝ掲載せる如く去る廿七日午後二時より大坂市曾根崎新地三丁目百五十三番地交詢社支社に於て開らきたる同支社開社式を兼ねゝる臨時總會は來會者三十餘名先づ規則案の議決を爲し役員の撰擧を終り夫れより北の新地醉鄙楼に於て宴會を開らきたるゝしあるが扨待を受けたる京神坂の賓客、及び新たに入社したる會員等合して數十名酒杯献酬の間に歡を盡くし退散したるは午後十時頃なり聞く所に據れば同日の總會にて梶原伊三郎（京都）矢田積（神戸）小林林之助、本山彦一、小林梅四郎（以上大坂）の五氏を委員ゝ撰擧し片桐正雄、梶原伊三郎（以上京都）中上川彦次郎、小川鈴吉、矢野寅一（以上神戸）金澤仁作、寒田源之亟、近藤德兵衛、佐藤暢、菊地侃二、五代龍作（以上大坂）の諸氏を編輯員に撰擧したり但し以上京都神戸の編輯員は即席從任したれども大坂の同員當撰者中には當日事故ありて出席せざるもあり未だ殘らず承諾したるにあらざるゝし尚ほ同支社の目的は本社の目的の如く智識交換世務諮詢は勿論なれども素て又社交の親睦を專ばらとし堂に集まりて互に同に依り公ゝ力と爲す積りのゝゝ其近傍の社員は月々三十錢宛を一團を醵出すれば無形の便利を受用し會を希望する同地ゝ其手續を爲し得

〇内閣文官試驗局本年高等官志願者りたるが尚五六日

〇本野一郎氏　は學を修め其成績最時歸朝しゝと云ふ里昂大學長ハ左ニ日本本野一郎氏（千八百八十七年四回無賞論文ニ格別ノ好成績チ

ル ニ從テ法律博對スル試驗チ要自作ノ論文チ提ノ敢闘ニ答辨本野氏ハ千八百ニ四個ノ白圏チ云フ各科目ニ千八百八十九年圏チ掛ル

千八百八十九年本野氏ハ其敢闘優等生ノ一人ニレンフチ所望シ里昂千八百

〇新婚者の風船旅ウハンプシヤーにする新夫婦の結婚めにとて式場ゝ歳の一大出來事ゝ來集せる者無慮臺は周邊に人の山方新郎新婦の爲めを拂すべくもわら警官の腕力のみな馬車は漸くゝして乗組の水兵は其數頗携へ金鑞鼓鼓ンの座にして芳紀りて工業に服せる黒色を裾みて風船は廿六年前マンチりて今は或る工場して雄飛の開えあて新夫婦未來の幸輕業球はゝの日の顧して徐ろに控中滅したればにや見

（第五千三百二十二號）